
マスカレードに異常なし！？ 第1話

水鏡樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マスカーレイドに異常なし！？ 第1話

【Nコード】

N5815A

【作者名】

水鏡樹

【あらすじ】

マスカーレイドという、小さな街。ウォルガレンの滝という巨大で美しい滝に魅せられた人々が開拓した街だった。そんなマスカーレイドに住む個性的な人たちの物語。第1話はウォルガレンの滝を壊して巨大な宿舎施設を作り、莫大な利益を狙う業者から、滝を守ろうとする住人の話。マスカーレイドの住民は無事にウォルガレンの滝を護ることができるのか？

その1：オートエーガンの朝

ウォルガレンの滝は、知る人ぞ知る名所だった。高さ数十メートルはある巨大な滝の上方は雲がかかっており、頂上の存在すら確認されていない未知の滝だ。

流れ落ちてくる清流は透きとおっており、飲用としても重宝される。さらに滝の内側に広がる特殊な鉱石が日光で反射し、水流の中で乱反射を繰り返してはまばゆい光を放つ。

また夜には別の鉱石が、日中に溜めこんだ光を少しずつ漏らし、独特な乳白色で辺りを淡く照らした。

緑豊かな自然には、小鳥のせせらぎが耐えることがない。朝露は木々を輝かせ、風は森と協力して合唱する。

そんな情景に心を打たれた人々が協力し、ウォルガレンの滝との共存を望んで村を作り上げた。

最初は滝を囲むように家が数件建っただけのこじんまりした、小さな村だった。

マスカーレイドと名づけられたその村で、村人と滝との共同生活が平和な時を刻んでいく。

だが、周囲の街が急速に発展していくことで、街と街とを結ぶ交通網の発展から、マスカーレイドの存在が公になった。

全ての都市から現れた人々はマスカーレイドを通り、全ての都市へと抜けていく。人口よりも、素通りや一泊で去る人の方が、圧倒的に多い。

ただ、堅固でない地盤と村人の意向によって、村の発展は急停止を向かえていた。

元々自給自足で生活していた住人は、マスカーレイドの豊かな緑を壊してまで金銭を稼ごうとは考えていなかったのだ。

反対するものもほとんどおらず、マスカーレイドは混乱一つなくまとまっている。昔もいまもその一点だけは変わらなかった。

もちろんマスカーレイドを訪れる人々をむげにするわけにもいかない。小さな宿泊施設ができ、人間同士はもちろん、盗賊やモンスターから旅人や住民を守るための自警団が作られた。

外食の施設も少しずつ充実していき、人々を蝕む病に対応すべく病院もできた。はからずも街は大きくなっていった。

それから数年が経過した現在。自然を壊さぬよう努力する住人たちの協力によって、マスカーレイドは現状維持のままだ。

ウォルガレンの滝の美しさ、心の病をも打ち消す雄大さを失うことだけは避けなくてはならない。たとえ、どれだけ月日が流れようとも、それが村人全員の願いだった。

ゆっくりと昇ってきた太陽が、マスカーレイドをたたえるように照らし始める。紅葉が涼風にゆられ、滝から続く清流では小魚の親子が散歩を楽しむ。

住民たちが寝ぼけ眼で一日を始めようと動き出すその頃、マスカーレイドのほぼ中央に位置する食堂『オートエーガン』では、せつせと働く人影があった。

米をとぐその人影は、十七、八歳ぐらいの、赤くきらめく瞳を持つ女性だった。三角巾に花柄のエプロン姿で、まくった袖は紫色のゴムでとめられている。

米を炊くための釜は業務用らしく、小さく見積もっても直径一メートルはあるだろう。女性が容易にかつげる代物ではない。ましてや釜の中には大量の米と水が入っている。並の男でも重労働のはずだ。だが、その女性にとって大した労働ではないらしい。何度も何度も米をすすいでは水を捨てるという作業を、鼻歌交じりでこなしていく。

米をすすぎ終わると、水を定量の位置まで注ぐ。それを釜に見合う大きな炊飯器の中へと押し込むと、炊飯のスイッチを入れた。

少し震えつつも炊飯器は稼働をはじめ。女性はそれを確認すると、三角巾を外して額の汗を拭った。内側から藍色の長髪が姿を現

し、大きく揺れる。

「ふう、下準備はこれでオーケーね」

袖を留めていた紫のゴムを取ると、今度はそのゴムを髪を結ぶのに使い始めた。慣れた手つきでポニーテールを作り上げた女性は、全体重を近くのイスへと預ける。

「終わったのか、二才」

二才と呼ばれた女性は自慢げに微笑みながら頷いてみせた。

「ええ、いつもの通りよ」

「相変わらず、手際のいいこった」

一升瓶を片手に、にんやりと微笑んでみせたのは、少し離れた場所に座っていた二才の母親のアルマだった。三十代後半で顔にしわが出てきたと気にしつつも、朝早くから夜遅くまで寝巻きのまま、一升瓶をかかえるのが日課の底抜け上戸だ。

「母さんが手伝ってくれば、もっと楽なのにさ」

「手伝うまでもないだろ？ 一人でなんでもできるんだから。さすがはわたしの娘だよ」

「はいはい。近所の人たちはみんな、母さんの子どもとは思えないって言ってるけどね」

すでに諦めてるのか表情一つ変えず、二才はアルマの目の前にドンと醤油のビンを置いた。中には黄ばんだ透明色の液体が入っている。

「ところで、本物の醤油はどこ？」

「なんの話だ？」

「あのね、色を見たら醤油かそうでないかなんて一発で分かるの！これ、ラベルは醤油だけど中身はお酢でしょ！」

アルマは豪快に笑いつつ、足元に隠していたビンを二才の前へと差し出した。ラベルには酢と書かれているものの、中の液体は黒い色をしている。

「さすがはわたしの娘だ。一発で見抜いてくるとはな」

「うるさいわよ、この酔っ払い。いい年なんだからいい加減子ども

みたいないたずらやめてよね！」

「へいへい、怖い怖い」

わざとブルブルと震えてみせるアルマを背に、二才は店頭へと足を向けた。

営業時間ではないので、店内にはだれもない。これから四つのテーブルとカウンターをきれいにふけば、開店前の準備は万全だ。

「さてと、さつさと終わらせちゃうか」

カウンターの内側に備え付けられた簡易の流し台で、ふきんを濡らして絞る。

手始めにカウンターを拭いていると、入り口のドアがおもむろに開いた。来客を知らせる呼び鈴が、チリンと乾いた音をたてる。

「あ、すみません。まだ営業時間じゃ……なんだ、マックスか」

入ってきたお客様に非の打ち所がない営業スマイルをみせていた二才だったが、入ってくるお客の顔を確認するやいなや、あつという間にしらけた無表情へと変わっていった。

「おいおい、なんだはないだろ？ 一応お客さんなんだから」

ブルーを基調とした流行の服で全身を覆った青年　マックスは、二才と同じ年か少し上ぐらいだろう。きちつと整えられた髪に手をやり、口の隙間から白い歯を覗かせる。

「口をずつと塞いでるって誓うなら、お客さんとして扱ってあげてもいいわよ」

「堅いこと言うなよ。おれと二才の仲じゃないか」

「どういう仲だったのよ。まったく」

顔をプイツと背け、店内の清掃に励む二才をにこやかに見守りながら、マックスはカウンターへと座った。

「まだ開店時間じゃないって、言ってるじゃない」

「いいじゃんか。もうすぐ開店なんだから。お得意さまには親切にするものだぞ」

「お得意さま？ 注文もせずに店に来る女の子をナンパしてばっかりじゃない。それじゃお得意様とは言えないわよ」

「クネスだつて同じようなもんだろ？」

いいながらマックスは視線を後方へと向ける。その先にはいつも開店から閉店までいすわるクネスの特等席があった。

「クネスはいいの。コーヒー一杯だけでも注文してくれるし、できあがった小説を投稿より先に読ませてくれるんだから」

「まだプロとしてデビューできてないような作品が、そんなに面白いのか？」

「あら。読んだこともなくせに、そんなこと言つなんて失礼よ」

二オが言い終わると、まるで呼ばれたかのように一人の客が入ってきた。黒髪におせじにも立派とはいえない服装で、軽く手を振ってみせる。

「いらつしゃい、クネス」

「やあ二オ。コーヒーをお願い」

言いながらクネスは入り口のすぐ横の　入ってきたお客さんからは扉の陰になり一番目立たない　テーブルへと座った。

「わかった。ちょっと待っててね」

マックスの存在を無視して、二オは流し台の横でコーヒーの作成へと取り掛かった。煎られたコーヒー豆の香ばしいにおいが、店内へと広がっていく。

「なあ二オ、今度の日曜日に一緒に出かけない？　なんでもイベント会場でぬいぐるみの展示会があるらしいんだ」

コーヒーを作っている二オのそばへ、ずいと顔を近づける。二オは眉一つ動かさず、コーヒーに視線を注いだままぶつきらばうに答えた。

「もしもし？」

「えっ？」

あつけにとられているマックスに、二オは仏頂面でなおも続ける。

「今の状況でもしもし以外に、なんて言えはいいのかしら？」

「そうだなあ、わあ嬉しい！　誘ってくれてありがとう……とか？」

二オのこめかみにうつすらと青筋がたっていく。それでもマック

スの瞳に動じたようすはなかった。もしかしたらすでに慣れてしまっているのかもしれない。

「飲食店は日曜日がかり入れ時なの。行きたいなら彼女といけばいいでしょ」

「一週間前まではいたんだけどね。またフラれちゃったんだ」

「だと思っただわ。毎回フラれると、毎日ここに通ってくるんだから

……」

入れ終わったコーヒをクネスへと運ぶ。

クネスは執筆中の作品の隅に、いまの会話をなぐり書きしていた。

店内で繰り広げられる数々の会話から小説のネタを探す。クネスがこの店にくる大きな理由だ。

「たまにはいいじゃんか。店はアルマさんにやってもらいなよ」

「母さんに？」

「昔はアルマさんが店やってたんだろ？ だったら一日ぐらい任せでさ、二才は羽を伸ばすつてのはどう？」

二才は無造作に髪をかきあげると、諦めた口調で述べた。

「それができれば苦労しないって」

自嘲か苦笑がよくわからない笑みを漏らし、コーヒーマーカーをきれいに洗う。

「なあなあ！ いいじゃんか！ 一回ぐらいさ！」

食い下がらずに声をかけるマックスを、二才はいらつきながらにらみつける。

と、マックスの背後の入り口でベルが鳴り、見慣れた人影が入ってきた。

「いらっしやいシェラ」

「えっ、シェ、シェラ！？」

背後に現れたシェラと呼ばれた人物に、マックスは必要以上に動揺し大きくのけぞっていた。

勢いあまってイスがひっくり返り、轟音と共に床へと落下する。

「いてえ！」

苦痛に歪むマックスのしかめっ面と思わず漏れた悲鳴が、オートエーガンの中にひびきわたった。そのようなすをちらりと横目で確認したクネスは、またもノートの端になにやら殴り書きをしている。

「まるで化け物でも見たみたいに、驚かなくたっていいじゃない…」

マックスを見下ろしながら、シエラはふくれっ面で腰に手をやった。

小麦色に焼けた体を部分鎧で覆いつつ、女性とは思えないほどの大きなツーハンドットソードを帯剣している。

乱雑に入り混じっていた緑色のショートヘアーは寝癖なのかファツシヨンなのか、二才はいまだに分からなかった。

「ちようどいいところにきたわ。マックス、シエラを誘えばいいじゃない」

「ええ！ シエ、シエラを誘うのか！？」

起き上がりながらちらりとシエラの顔を見やり、椅子へと座りながら二才へと視線を戻す。

「や、やめとく……」

「なんの話か知らないけど、二才を誘えてわたしを誘えないってのは、どういう見なのかしら？」

背後から忍び寄ったシエラが、マックスの首にヘッドロックを仕掛ける。グエツと蛙が鳴くようなうめき声と共に、マックスの顔は紅潮していった。

「わたしの姿を見て急に慌てるなんて、おかしくない？」

「べ、別に慌ててなんか……それより苦しいって……」

「やましいことでも考えてるから、びつくりしたんでしょ」

「やましいことなんてないから、首から手を離してくれえ！」

マックスの渾身の叫びで、ようやくシエラはマックスから手を離れた。

「たくさんの女性を泣かせた罰よ。思い知った？」

マックスは何度も咳を繰り返し、落ち着きを取り戻してからシエ

ラに弁解を始めた。両手を大きく左右に振りつつ必死の形相で、マックスは声を荒げている。

「違う違う！　いつも泣かされるのはおれの方だって！」

「どうかしらね……」

マックスの隣へと座り、シエラは二オにコーヒーを注文した。満面の笑顔で注文を受けた二オは、再びコーヒーメーカーを稼働させる。

マックスはむくれつつも、これ以上二オを誘うのは無理と判断したのか、シエラの後ろを通って店の外へと向かっていった。そのついでとばかりに、シエラの後ろでボソリと何かをつぶやく。

「なんですって！」

突然声をあげてシエラが立ち上がると、慌ててマックスは走り出していた。早くも店の入り口へと移動を完了させると、イッシツシといやらしげな笑いを放ちつつシエラに向かって大きく手を振る。「シエラも恋愛の一つでもすれば、おれの行動がわかるようになるって！」

「余計なお世話よ！」

腕を振り上げて迫るシエラから逃れるべく、マックスは店の外へと飛び出していった。

「マックスのやつ、なんか言ったの？」

振り上げた手のやり場に困りつつもゆっくりと下ろし、席に戻ったシエラへ二オが尋ねる。

「ひがんでないで、恋人の一人でも作れ……だつてさ。大きなお世話よ、まったく」

ため息まじりに報告すると、シエラはカウンターに肘をついてあげを乗せた。視線は二オの手先にあるコーヒーメーカー。コーヒーができるのを待っているようだ。

「おまちどうさま。わたしのおごりよ」

完成したコーヒーにミルクと砂糖を多めに入れて、シエラの前へと置いた。かぐわしいコーヒーの匂いがシエラの鼻を撫でるように

くすぐる。

「おごり？」

ニオから渡されたコーヒーにゆっくりと口をつけつつ、シエラが聞き返す。ニオは小さく微笑みながら、シエラの疑問に答えた。

「マックスを追っ払ってくれたお礼と、シエラへのお詫び」

「お詫び、か……」

カップを皿に戻してから、シエラの口から再び大きなため息が吐き出された。中に残っているコーヒーに波紋が生まれ、淵までのわずかな距離を広がっていく。

「なんで……あんなやつ好きになっちゃったのかな？」

シエラの疑問に対して、ニオは明確な答えを思いつかなかった。

ただ、シエラの胸に渦巻く焦燥を、ほんの少しでも和ませることはできそうだった。

「別にわたしもマックスが嫌いなのじゃないよ。相手を振るよりも振られるほうが圧倒的に多いみたいだし、女の子に対しての優しさも備えてるしね」

「でも、しりが軽すぎるじゃない。一人の女性だけをずっと愛し続けるなんてできないタイプだしさ。ましてや、わたしみたいな男っぽい女なんてきつとタイプじゃないよ。会ったびにいつも口げんかしてるし……本当に、どうしてあんなやつ好きになっちゃったんだろ」

頭を抱えてうめくシエラの横へとニオが腰をかける。ポンとシエラの肩に手を置くと、一瞬シエラの体がビクツと震えた。

「もつと自信持っていていいと思うけどな。シエラはとっても魅力的な女性だよ」

「でも、女なのに筋肉質で、傭兵を仕事にしてるんだよ？」

「女だから、男だからって分ける必要はないと思うけど。男も女も千差万別。いろいろな人がいるから面白いんじゃない」

「そうかな……」

藍色の前髪をかきあげてから、ニオははにかむシエラと向かい合

った。照れているのか、シエラの小麦色の顔にほんのりと赤みがさしている。

「そうよ。シエラは美人だし、スタイルだっていいんだから。わたしが男だったら絶対に放って置かないよ」

「そっか……ありがとう。なんだか少し気分が晴れたよ。わたしより年下なのに、二オはしっかりしてるね」

「母親があだからね、しっかりしてないとやってられないんだよ」
カウンターの後ろにある調理場を指差す。馬鹿でかいクシャミが調理場からこだまし、二オとシエラは二人でコソコソと含み笑いをした。

「ほんと、二オに出会えてよかったよ……」

「そんな、大袈裟な……」

二オは照れくさそうに鼻の頭をかきつつ、時計へと目をやる。八時をすでに少し回っている時計は、オートエーガンの開店を意味していた。

「さて、と。今日もはりきっていくわよ！」

両手を天井へと突き上げ、気合を入れる。クスクスと微笑むシエラと小説に没頭しているクネスを店内に残し、二オはいったん外へと出た。

出入り口の外側にかけてあるふだをひっくり返すと、クローズからオープンへと表示が変わった。これでオートエーガンの正式な一日が始まったことになる。

オープンの表示を確認し、満足そうにうなずく二オ。その背後から男の声が聞こえてきた。

「おはよう二オ。いつものやつを頼むよ」

声のしたほうを向くと、村にはそぐわない迷彩服とくわえ煙草の男が、二オに向かってウインクをしていた。長身の体と頬を縦断する大きな傷あと。表面からは確認できないが、懐には二丁の拳銃が隠されている。

「いらっしやいハンターさん。Aランチの肉抜きね」

ハンターがうなずいてみせると、二才は素早く店内へと戻り厨房のほうへと消えていった。

店の中へとハンターが入っていくと、シェラが軽く手を上げてみせた。

「来てたのかシェラ。ちょうどよかった」

「んっ？ わたしになにか用事？」

ハンターはたばこをカウンターの上に備え付けられた灰皿で消すと、シェラの隣へとすわった。ポンとシェラの肩を叩き、意味ありげに口元を緩ませる。

「いい仕事があるんだが、どうだ？ 一緒にやらないか？」

「賞金首でも見つけたの？」

「いや、護衛の任務だ。数日間の工事を無事完了させるために、腕のいい傭兵が何人でもほしいらしい」

「腕のいい傭兵ねえ……」

シェラがじと目でハンターを凝視すると、ハンターは必要以上にあわてながらすぐさま弁解し始めていた。

「そりゃ、おれは傭兵じゃない。ただのしがない賞金稼ぎさ。ただ傭兵として雇われたって十分に仕事はできるつもりだぜ」

「まっ、ハンターの腕なら問題ないだろうけどさ……ところでその工事ってマスカーレイド内なの？」

「ああ。そうだが」

「だったら工事の護衛は自警団に頼むのがすじつてもんでしょ。どうしてわざわざ傭兵を募集するわけ……ってわたしのコーヒー！」

シェラの飲んでいたコーヒーを横から拝借したハンターが、あっという間に飲み干してしまった。空になったカップははんたーの手により、早くも流し台へとその居場所を移している。

「馬鹿だなあシェラ。自警団に頼めない仕事だからこそ、傭兵が雇われるんじゃないか」

「怪しい仕事だって断言してるような……」

「おおむね傭兵の仕事なんざ、怪しい仕事じゃないか」

「否定はしないけどね」

名残惜しそうに流し台のカップを眺めながら、シェラがカウンタ―を指でトントンとたたく。

小さなため息をもらしてから、シェラはハンターへと向き直った。「最近仕事もなかったし、財布の中身が寂しいのも事実だから行ってあげてもいいわよ」

「じゃあ、さつそく依頼主のところへ行こうぜ。善は急げってな」イスから立ち上がった二人の前に、ちょうど二オが料理を携えて戻ってきていた。

「ハンターさん。Aランチ肉抜き、おまちどうさま！」

「わりい二オ。やっぱそれキャンセルだ」

「ええ！ もう作っただよ！ 作った後にキャンセルって言われても……」

頬をプクーツとふくらませて、肉の入ってないAランチをどんとカウンタ―に置く。

「まあまあ、金は払うからさ。二オの朝食にでもしてくれ。じゃあな！」

ハンターはポケットの中に入っていた小銭を乱雑に置くと、シェラをつれて店を出て行ってしまった。

「朝食についていわれても、おなかすいてないしな……しょうがない。母さんの酒のつまみにでもするか」

置いていった小銭を確認しながら、ボソリとぼやく　　が、すぐさま二オは異常事態に気がついていった。

「げっ、ハンターさんの小銭、Aランチの料金にまったく足りてないじゃん！ もう！」

散らばっていた小銭を適当にしまつと、作ったばかりのランチを厨房へと持って帰る。

店のすみにいたクネスは苦笑しながらも、原稿のすみへと殴り書きを走らせていた。

その2：ウォルガレンの滝の危機

あきらかに違和感を感じたのは、正午になる少し前の時間帯だった。オートエーガンは比較的安価で美味しいものが食べられると近所でも定評がある。マスカーレイドの住民の多くは昼食をここでとるため、昼食時は一番忙しい時間帯なのだ。

それでも二才の母親が店を手伝うことは皆無で、二才は席の埋まった店内と、火にかけた鍋が並ぶ厨房をかけまわって休む暇などない。

だが、今日のオートエーガンはほとんど席が埋まっていない。朝早くに来たままコーヒ一杯で粘っているクネスを除けば、テーブルに二人とカウンターに一人しかいない。

「今日は商売あがったりね。なにかあったのかな」

営業中は店外へと出られないため、マスカーレイドのようすは訪れたお客様に聞くしか手立てがない。

「たまにはいいかもね、こんなお昼も。毎日働きっぱなしで疲れ……」

あくびまじりにぼやいていっていると、突然オートエーガンの入り口が開け放たれた。

「大変だよ、大変！」

飛び込んできたのは二十センチ程度の羽の生えた人種　フェアリーだった。動物の皮でこしらえた小さな服で身を包み、腰には帯剣しているかのように見える。ただ、正体は本物の剣ではなく、行商人であるシェリーに以前売ってもらった小さな針だ。

「フェア、フェアミリー！」

二才は思わず叫んでしまった口を、すぐさま両手で塞ぐ。だが、時はすでに遅かったようだ。

「フェアミリーだと!？」

「うわっ、ほんとだ!」

「やばいぞ、巻き添え食らう前に逃げる！」

口々に暴言をはきつつ恐怖に顔を歪ませ、クネスを除く三人は料金を払わず脱兎のごとく逃げ出してしまった。

「ちよつとまって！ 代金未払いだよ！」

二才が慌てて叫んだ時には、すでに三人は店の外へと脱出を完了していた。

「今日は厄日かしら……閉店したほうがいいかも」

「本当、どうしちゃったんだろうねえ！」

何が原因かまったく分かっていないフェミリーは、エヘへと笑いながら去っていった三人を見送っている。

二才は深いため息を吐きながら、とぼとぼと厨房へと入っていくところだった。それに気づいたフェミリーが慌てて声をかける。

「それよりも二才、大変なんだってば！」

「あーあ、確かに大変ですよー。フェミリーがこの時間帯に来るってわかってりゃ、先に料金を貰ってたのにさ……」

がつくりと肩を落としてつつフェミリーをどかし、厨房の中へと入っていく。それを阻止しようと背後からフェミリーが二才の服をつかんだ。二才ははずると引きずられつつ厨房から引っ張り出される。

「ちよつと、人のせいにしないでよ！」

「どう考えてもあんたのせいでしょ！」

ちっちゃなフェミリーの頭を指でつまみ、二才は目の前へと引き寄せた。どんぐりまなこの目をくりくりさせながら、フェミリーは首をかしげている。

「なになに、どうかした？」

「フェミリーが突然来ると客が逃げ出すの。来る時は電話でことわってから来てっていつてるでしょ？」

「どうしてわたしだけ！ わたしがなにをしたっていうのよ！」

「どうやら先週の騒ぎでも、まったく懲りてないみたいね……」

先週の騒ぎといわれ、フェミリーは目線をわずかに上向かせた。

それから小さくポンと手を打つ。

「ああ、ボールを拾ったから、それで遊ぼうってここへ来た時のこと?」

「一般的には、あれはボールじゃなくて手榴弾って呼ばれてるんだけどね……」

二才にすごまれ、フェミリーは苦笑いを発していた。逸らそうとしたフェミリーの視線をすかさず二才が追いかける。

「それも変なゴミがついてるとかいつて、ピンを抜いちゃって……ハンターさんがいたからよかったようなものの、もう少しでオートエーガンは大破してたのよ!」

「まあまあ、いいじゃないの。結局爆発しなかったんだからさ」

動じたようすもなくペロツと舌を出すフェミリーに、二才は叱る氣力を失っていた。

「ああ、もういい。で、なんの用なの?」

頭から手を離すと、ハツと思い出したような顔でフェミリーは機関銃のようにまくしたてた。

「そうそう! 大変なのよ! 王都の業者がマスカーレイドを宿場町にするとかいう計画をたてたらしくて! 手始めにウォルガレンの滝をなくそうとしてるのよ!」

「なんですって!」

「マスカーレイドってあの滝が街に食い込む形で作られてるでしょ? だけど回りは地盤が弱くって、これ以上街を広くできないじゃない。だから、あの滝を壊せばもっと有意義にマスカーレイドの土地を利用できるって! このままじゃウォルガレンの滝がなくなっちゃうよ!」

「そんなこと、マスカーレイドのみんなが許すはずがないわ!」

「もちろんみんなで抗議してるわ。だけどむこうも腕利きの傭兵を雇ったらしくって! このままじゃみんな殺されちゃうよ!」

半ベそをかきながら、フェミリーは二才の服の襟を掴んだ。この街の住人のほとんどはウォルガレンの滝に引かれ、地盤の堅いわず

かな土地に建築物を造り、住むことを試みた人々の子孫だ。長寿のフェミリーにいたっては、マスカーレイドが出来た頃には生まれており、住民にちよっかいを出している。

二オもごたぶんに漏れず、この街を作った関係者の孫にあたった。二オが生まれた頃には祖父母はすでに亡くなっていたが、なにも言われずとも祖父母がここに住みたいと願った気持ちがあった。

そしてウォルガレンの滝と共にすごせる昨今に喜びを感じると共に、祖父母に感謝の念をおくっていたのだ。

「どうにかしてよ二オ！ 二オなら顔が広いからなんとかするでしょ！」

「そつ、そういわれても……ぐえつ」

唐突の願いにしどろもどろしていた二オの頭を、背後からだれかが押さえつける。

振り向くと、そこにはぎらりと目を鋭くさせたアルマが立っていた。

「フェミリー、そこに案内しろ」

「えっ、アルマさんで大丈夫？ 酔っぱらってるんじゃないの？」

「酒は飲んでも飲まれるな。わたしは酔っぱらったことなんかない」

「ほんとかなあ……でも人では多いに越したことはないか。こつちだよ！」

フェミリーの案内で二オとアルマは店を出た。後ろにはちゃっかりクネスの姿もある。

「クネスさんも行くの？」

「主のいない食堂で留守番してても、注文には応えられないしね。ぼくもあの滝には興味があるし」

「んじゃ、行くよ！」

二オが表の看板をクローズの状態にしてから、四人はオートエーガンを後にした。

「ウォルガレンの滝を壊すな！」

「マスカーレイドの自然を大切に！」

「心無い建築業者は早々に立ち去れ！」

二才たちが目的地　ウォルガレンの滝にたどり着くと、口々にとなえられる主張に加え、文字で内容を示したプラカードが周囲で乱舞していた。

抗議している人たちは、二、三十人ぐらいか、その中には二才の店の常連も多かった。

野次馬気分で事の成り行きを見守るものもいるが、眉をつり上げたり目を血走らせている人がほとんどだった。

「あ、アルマさん！　お久しぶりですう！」

アルマをみつけて声をかけてきたのは、マスカーレイドができた当時から食料品店を営む『ライクガン』の住み込み店員、とがった耳に紫水晶の腕輪が目立つエルフのラビだ。

エルフ族に伝わると言われる桃色のワンピースの上に、ひらひらとしたレースのついたエプロンを着用している。どうやら二才と同じく、仕事中に飛び出してきたらしい。

「おお、アルマじゃないか！　おまえも一緒に抗議してくれ！　このままじゃ本当に滝がなくなっちまう！」

ラビに続いたのは『ライクガン』の二代目店長のユキだ。アルマとは年齢も近く、滝の神秘をわかちあえる旧友だ。

藍色のトレーナーと同色のジーンズ、エプロンも着用しているが、ラビのようにひらひらとしたレースはついておらず、ポケットがついただけのシンプルなものだ。

「そのために来たんだ。まかせとけ！」

言うが早いか、アルマは人の波を潜り抜けて、あっという間に抗議グループの最前列に移動してしまった。

「みなさん、お静かに！　いま責任者からお話があります！」

二才もアルマに続こうと人ごみに入り込んだとき、工事関係者が作ったであろう簡易ステージで男が叫んだ。一瞬にして辺りが静まりかえる。

簡易ステージに上がってきたのは、ちょび髭をたくわえた、恰幅のいい背広姿の男だった。つりあがった目にメガネをかけて、マスカレードの民衆を見下ろしている。

「わたくしがこの工事を管理する最高……いいですか？ 最高ですよ？ もっとも高いと書いて最高の責任者であるレスチア「クマロフ」です。以後お見知りおきを……」

手を前に振り下ろしながら、レスチアは丁寧に頭を下げた。

だが、その態度が逆にマスカレードの住民を逆なでしてしまったようだ。

再び始まる罵詈雑言の中、どこから取り出したのか あるいは最初から持っていたのかもしれない 甲高い笛の音を吹き鳴らした。突然の騒音にさわぎがおさまると、レスチアが一度咳払いをしてから話を再開させる。

「わたくしたちは、きちんと王都の許可を得てこの工事に取り掛かるのです。なんびとたりとも、工事の邪魔はさせません」

「だまれ！ 王都が許可を出したってマスカレードの住民が許可を出すもんか！」

住民の一人が拳を振り上げつつ述べた意見は、容易に周りからの支援と同意を受ける。

それでもレスチアは動じたようす一つ見せず、笛を高らかに鳴らすだけだった。

「あなたたちはマスカレードの住民である以前に！ 国の住民なのです。あなたたちは国の決定事項には逆らえないんですよ」

悔しそうな齒軋り音や、地団太を踏んでいる民衆の中から、ひょいと手が挙がる。抗議の最前列でレスチアの言い分を聞いていたアルマだ。

「ウォルガレンの滝を壊して、なにをしようっていうんだい？」

アルマの問いにレスチアは一度咳払いをしてから、胸を張って答え始める。

「よくぞ聞いてくれました。わたくしたちはこの滝をなくし、ここ

に高級ホテルを建てようと計画しているのです。ここの宿泊施設は貧弱で、ないに等しい。せっかく各都市を結ぶ中継地点なのですから、それ相応の施設を作れば、街に滞在する旅人も増える。そうなれば、みなさんの財布も暖かくなり優雅に生活できる。いい計画とは思いませんか！」

胸を張ってレスチアが答える。もちろん、それで納得するアルマではなかった。

「優雅な生活を送りたいのは、アンタだけだろうが」

「失敬な！ わたくしの真心が……」

話の途中でアルマは簡易ステージの上にあがると、レスチアのあごを握りしめた。

「ウ、ウゴゴゴ！」

「だったらわたしたちの返答はこうだ。優雅な生活など一切望んでいない。望んでいるのはウォルガレンの滝との共存だ。わかつたらとつとと消えうせな！」

あごを持ったままレスチアをステージへと叩きつける。周りからは拍手喝さいがアルマに向けられ、アルマは両手を挙げて笑顔で周りに応えた。

「く、くそつ、こうなったら！ カモーン、傭兵さん！」

痛んだあごを押さえながら、レスチアが大声で叫ぶ。

すると、奥にあったプレハブ小屋から二人の男女が現れ、簡易ステージへと上がる。マスカーレイドではよく見る顔の出現に、人々がどよめきたった。

「シェラじゃない！ どうしてここに！」

ようやく最前列までたどりついた二オが、出てきた女性に向かって叫ぶ。

シェラは一瞬しまったと言わんばかりに顔をしかめたが、すぐさま気持ちを落ち着かせると、二オに頭を下げた。

「わるいね二オ。わたしもこの滝が嫌いなわけじゃない。だけど傭兵は雇用人の命令には絶対なのよ」

「だったら、どうしてこんな仕事を引き受けたのよ！」

「初めからこの滝を壊すって知ってたなら引き受けなかっただろうけど…… 契約を済ませた後に仕事の内容を聞いたから。そこでやっぱりやめたなんていえば、傭兵としての信用は地に落ちる。わたしが今まで築いてきたものがね」

剣の柄を軽く握りながら、シエラは苦笑していた。二才はシエラからもう一人の男へと視線を移す。

「じゃあ、ハンターさんはなんで！」

「おれは賞金稼ぎだ。金のためならなんだってやる」

二才と目をあわそうともせず、ハンターは拳銃に弾を込めなおしていた。一丁は銃身の短いパイソン4インチ、もう一丁はオートマチックのデザートイーグル。ともにハンターのオーダーメイドで、グリップには金色の星の紋章 中にHと描かれている がかたどられている。

「くうー……」

悔しそうにうめきながら、二才はもう一度二人の顔を確認した。平然としているハンターに比べ、シエラは抗議の人の視線に影を潜めている感じが強い。

「さあ、傭兵のお二人には前金の分しっかり働いてもらいましょうか！」

レスチアの合図で、シエラとハンターの二人は簡易ステージから民衆の前へと飛び降りた。

二才はざつと辺りを見回してみた。二人の出現で先ほどまでの勢いが無くなり、一步、また一步と後ずさっていく。

マスカーレイドきつての武道派の二人が相手では、みんなの腰が引けても仕方がなかった。

「くつ、いったん引き上げよう。でないといたずらに怪我人を出すだけだ！ なにかいい考えがある人、思い浮かんだ人はオートエーガンへ来てくれ！」

アルマの号令で、みんなが一斉にその場から立ち去っていく。

「フェミリー！」

「なあに、ニオ？」

立ち去りつつニオがフェミリーに耳打ちをする。フェミリーは無言で頷き、どこかへ飛んでいってしまった。

逃げる途中アルマは一瞬だけ、簡易ステージ 特にハンターへと視線を送った。ハンターは消えていく民衆のありさまを眺めながら、静かにほくそえんでいる。

「ハンター！ 見損なったよ！」

「なんとでもいえ。金がなければ生きていけないんだからな」

「くっ！」

アルマは未練を振り切るように、その場から駆け足で去っていった。

その3：シエラの苦悩とハンターの欲

「いやいやいやいや、ご苦労ご苦労。噂どおりの実力でこちらも助かるよ。ささっ、控え室に戻ってゆっくりしよう!」

レスチアが喜び勇んでハンターたちの控え室へと戻っていく。その背後をハンターとシエラはゆっくりとついていった。

控え室に戻ると、レスチア自ら二人にお茶をついで回り、バンバンと力強く肩を叩いてきた。

「いやー、本当に心強い。正式に工事が始まるのは明後日だが、明日以降も愚民どもがなにやらいちゃもんをつけてくるだろう。今日と同じようにおっぱらってくれよ」

「そんなことはわかってる。それよりも工事完了の暁に払われる、前金の十倍の報酬は用意できてるんだろうな?」

「当然だとも。わたしは嘘などつかん」

「だったらアンタはふんぞり返っていてくれればいい。あとはおれたちがやる」

クイツとお茶を飲み干してハンターが告げると、レスチアが満足げに何度も頷く。

「では諸君。また連中が来るまでゆっくりと休んでいてくれたまえ。ハッハッハ!」

高笑いと共に、レスチアは控え室から去っていった。工事の準備にでもとりかかるのだろう。

「ハンター。正直わたしは気が乗らない」

ずっと無言でお茶に口をつけていたシエラが、おもむろに口を開いた。

「ほう、どうして? こんなに金になる仕事は滅多にないだろう?」

「確かにそうかもしれない。だけどわたしはウォルガレンの滝が好きだし、ニオやアルマや、他のマスカーレイドの人たちだって敵に回したくないんだ」

フムとハンターは頷くと、困惑気味に顔を伏せているシエラに向かって冷たく言い放った。

「だったら、やめればいい」

「なっ！」

シエラが顔を上げ、ハンターに反論しようとする。それを遮るようにハンターが口を挟んだ。

「おれは金になる仕事があると言って、シエラはついてきたただけだ。金がいらないうつでもやめればいい。ただし、自ら望んだ仕事を自ら放棄するなど、傭兵にはあつてはならないことだ。これから先、シエラの信用問題にかかわってくるんじゃないのか？ さつき自分で言つてた通りにな」

歯をくいしばって、シエラが耐える。ハンターの言うことは正論で、反論の余地がなかったからだ。

シエラにとつて傭兵という職業は生活の一端を担っているものだ。そして他の職業よりも信用というものが大きく仕事量を左右させる。信用できない傭兵など、だれも雇わないからだ。

シエラは数年前から傭兵という職に就き、隣町へ移動する商人の護衛というような小さな仕事から盗賊団から宝を死守するという大きな仕事までそつなくこなしてきた。その努力のおかげで、シエラの傭兵としての信用は高い。

だが、信用を得るのは大量の時と結果が必要なにもかかわらず、信用を失うには一瞬の時、一つの行動があればいい。

もしシエラがいま傭兵としての信用を失いたいと思えば、雇い主であるレスチアを殺せばいい。雇い主に牙を向く傭兵など、だれも雇いはしないだろう。

長い時も、結果を積み重ねる必要もない。

信用は望めば簡単に失えるのだ。

ここで仕事を放棄したとなれば、雇い主を殺したまでとは行かなくても、信用は地に落ちるだろう。必要だから雇ったはずの傭兵に仕事を放棄されては困るからだ。

そして失った信用を取り戻すためには、いままでよりもさらに多くの時と結果が必要になる。

ちよつと仕事を成功させたぐらいで、失った信用は戻らない。それほど信用というものは重くのしかかってくるものだった。

「まっ、よく考えるんだな。今までの努力を無駄にしてまで、滝とマスカーレイドの連中との共存を望むって言うなら、おれも止めはしないさ」

ハンターは座っていた椅子から立ち上がると、部屋から出て行くとした。

「どこへ行くんだ、ハンター」

「おれにはおれの仕事があるんでな。まっ、今日はもう二オたちも来ないだろうからゆっくり休みつつ考えるんだな」

部屋から出て行ったハンターを見送ると、シエラは頭を抱えてしまった。

「どうすればいいんだ。こんな仕事、請けなければよかった……」

シエラの瞳から一筋の涙がこぼれ落ちる。

うつむいたまま動かなくなったシエラの横で小さな生物がパチクリとまばたきを繰り返していた。二オに指令を受けて偵察にやってきていたフェミリーである。

だが、シエラはよほど精神的に参っているのか、フェミリーの存在にまったく気づいていない。

フェミリーは首を傾げつつも、シエラに声をかけることなく控え室から飛び出していった。そのまま空を飛び、オートエーガンへと向かって飛んでいく。

「ただいまー」

フェミリーの帰還を心待ちにしていた面々が、暖かく迎え入れる。オートエーガンの中は思ったよりも人が少なく、二オ、アルマ、クネスの他にユキとラビが姿を現していたが、他にはだれもいなかった。

もしかしたら他の住民もそれぞれいろんな場所に集まって、作戦を

練っているのかもしれない。

「ご苦労様フェミリー。だれにもみつからなかった？」

「大丈夫だと思うよ。だれにも追いかけてないし」

「フェミリーの大丈夫はあてにならないが、まあ気にしてもしょうがないな。話を始めよう」

アルマの提案に全員が頷く。まず始めにフェミリーが得た情報をみんなに話し始めた。

「工事が始まるのは、明後日からみたい。これから二日間で工事の下準備やらなんやらをするみたいだね」

「そりゃ、そうだろうな。来てすぐさま工事できるなら、黙って開始するだろうし」

アルマの意見に周りが頷く。フェミリーは話を続けた。

「レスチアとか言う男はハンターとシエラがわたしたちを追い払ったんで、かなり上機嫌だったよ。それから二人が雇われた条件は、前金と成功報酬みたいだね。工事を無事に成功させたら、二人は前金の十倍の報酬がもらえるらしいよ」

「前金がいくらかは、分からないのか？」

「さあ？」

「それじゃあ意味ないだろ……」

五人が一斉にじと目でフェミリーを見る。フェミリーは乾いた笑いを放ちながら、頭をかいてみせた。

「でも前金の十倍でしょ？ 傭兵の仕事なら最低でも十万バツぐらいはするんじゃないかな？」

ニオが言うと、ユキが頷いてみせた。

「仕入れ先の商人が一つの街を移動するのに一人二万バツぐらいは必要だと言ってた。それは傭兵の仕事としてはかなり低いランクの仕事だからなあ」

ユキの意見にクネスも続く。

「今回の工事が成功してホテルが立てば、それこそ莫大な利益があるレスチアとか言う男に転がり込むんじゃないかな。どうせ滝を壊

すだけでなく、ホテルを造る仕事も請け負っているだろうし。それを考えれば十万なんて金は、はした金だろうね」

「となると……最低でも報酬は百万バツ？」

全員が一斉にため息をなく。お金のためにシエラたちが働くなら、こちらがそれ以上の報酬を準備すればいい。

だが、百万というお金はマスカーレイドの住民にとっては莫大な大金だった。

アルマがレスチアにいったとおり、マスカーレイドの住人はお金に執着がない。生活に差し支えない程度の収入の人がほとんどなのだ。

「やっぱりシエラたちと、戦うしかないのかな……」

唸り声をあげる二オの横で、フェミリーがパツと瞳を輝かせた。その後まくしたてるように新たな情報を告げた。

「そうそう。シエラはこの仕事を引き受けなければよかつたつてかなり後悔してたよ。滝も壊したくないしわたしたちとも争いたくない。でも傭兵としての信用のためには仕事をこなすしかない。そのジレンマにはさまれてるみたいだね」

「それ、本当？」

「もちろん。わたしがすぐ隣で飛んでもまったく気がつかないくらい落ち込んでたよ」

全員の顔が顕著に曇った。それはこちら側としても同意見だったからだ。

シエラもハンターもこの街に住んでいて、今まで仲良くやってきていたのだ。できることなら争いたくはない。それはだれの心の中にもある苦悩だった。

「でも、シエラがその調子ならわたしに考えがあるわ」

二オが手を上げつつ口を開く。ラビが首をかしげながら、

「本当ですかあ？」

尋ねると、アルマが二オの頭の上に手を置いた。

「わたしに似て優秀だから大丈夫だよ」

「街のみんなは、アルマの娘とは思えないっていつも言ってるぞ？」
ユキに言われてニオがプツとふきだす。だがアルマはまったく動
じたようすもなく、コブシを振り上げた。

「よし、それじゃあハンターはわたしに任せろ！ アルマⅡグロス
&ニオⅡグロスの親子がこの問題、いつきに解決してやるうじゃな
いか！」

その場にいた全員が勢いよくアルマに続いた。だが、アルマはす
ぐに腕を下ろし、

「でも今日は眠たいから明日にしよう。工事は明後日からだから大
丈夫だろ」

あくびまじりに寝室へと消えていくアルマを見ながら、一同は不
安に包まれていくのだった。

一夜明け、再び簡易ステージの前にマスカーレイドの住民が集ま
りだした。それを受けてレスチアが、ハンターとシエラを引き連れ
て現れてくる。

「みなさん、もう諦めてください。滝を壊せばみなさんは金持ちに
なれる。金持ちということは同時に幸せも手に入るということす
よ！」

「だまれ！　すでに我々は幸せなんだよ！」

どこから発された声に反応して、シエラとハンターがレスチア
の前に出る。ハンターは昨日とまったく変わらないが、シエラはあ
まり眠れなかったのか目の下にくまが出来ている。

「はい、はい、はい！」

二人の出現を待ってましたとばかりに、ニオが手を上げた。

じろりと睨みつけるハンターに首をかしげるシエラ。ニオは含み笑
いを漏らしながら、シエラへと告げた。

「ハンターさんとはかく、シエラがその気ならわたしにだって考
えがあるんだよ」

「な、なによ……」

とつぜん強気になった二才に不吉な予感でも感じたのか、シエラが一步あらずさった。

その様子に自分の作戦が成功するという予感を強めた二才は、自身あげげに腕を振り上げながら大声で叫んだ。

「シエラの好きな人を、ここでみんなに言いふらしてやる！」

「なっ、なっ！」

瞬間的に顔を真っ赤にしたシエラに、周りの住人が野次を飛ばす。慌てふためくシエラに追い討ちをかけるように、二才の背後から聞きなれた声がシエラの耳に届いた。

「なんだ、シエラって好きな人いたんだ。だったらおれの気持ちがかかったって良さそうだけどなあ」

首をかしげながらも興味深そうに、二才の背後でシエラを見上げているのは、マックスだった。

昨日とは違うものの流行の服という点では変わらない、赤や黄色の明るい色を基調とした目立つ服装になっている。

「う、うあ！ マックス、なんであんたがここにいのよ！」

「いや、なんか騒がしいからちょっとのぞきに来たところだけど。」

まさかシエラの告白が聞けるとは思わなかった

「だ、だれが告白するって言った！ 二才がばらそうとしてるだけじゃない！」

予想外の展開にシエラは慌てて簡易ステージから飛び下り、二才の両肩をがっちりつかんだ。

「お願いだからやめて！ そんなことされたらわたし生きていけない！」

「どうしよっかな、せっかく聞いてくれる人がこんなにいるんだし……」

「お願いだから、このとおりだから、勘弁してよ二才！」

ペコペコと頭を何度も下げるシエラを意地悪そうに見下ろしつつ、二才がポツリとつぶやく。

「じゃあ、この仕事から手を引いてくれるよね？」

「あ、あう……」

口をパクパクさせながらがつくりと膝をついたシエラは、二才の問いかけにゆっくりとうなずいた。

「ごめんねシエラ、ありがとう」

「これでわたしの傭兵としての信用もがた落ちか……」

「お金に困ったらわたしに言つて。オートエーガンの用心棒兼ウエイトレスで雇つてあげるからさ」

「傭兵が職にあふれてウエイトレスか、トホホ……」

がつくりとうなだれたままシエラは立ち上がると、トボトボとその場を立ち去つていった。

「おい、ちよつと待て！ 前金払つてるんだからきちんと……」

レスチアがしゃべり終わるまえに、パンパンに膨らんでいる封筒がレスチアの腹へと直撃した。分厚い中身と会話から、相当な量の札束が入っていることだろう。

「前金は返すわ！ あとは好きにやつて！」

ぶつきらばうに吐き捨てると、シエラは立ち去ろうと歩みを進めた。そして二才の横でピタリと一度止まる。

「ハンターには気をつけるのよ」

「えっ？」

「なにかわたしに内緒で、企んでるみたいなの。油断したらダメよ？」

「う、うん……」

あいまいながらも頷く二才の肩をポンと叩き、シエラはそのまま走り去ってしまった。

「こうなったらおまえ！ あいつの分もしっかり働くんぞ！」

ハンターを指差しつつ、レスチアが怒鳴り散らす。ハンターはさして気にしたようすも泣く。左手で耳をほじくりながら。右手をVの字にしてレスチアの前に差し出した。

「シエラの分まで働くつていうなら二人分の報酬を貰わないと割に合わんな。もちろん前金も二人分だ」

「いいだろう。ただし、女の前金はいくらを追いかけてからだ！」
「ほいほい、了解しましたよ。依頼主様」

ハンターはポケットからたばこを出して火をつけると、大きく吸い込み鼻から煙を出した。

口にたばこをくわえたままあらためてパイソンを抜くと、銃口を二オの眉間へと突きつける。

「とうわけだ二オ。これは遊びじゃないしおれにも生活がかかっている。知り合いだからといって、好き勝手やらせるわけにはいかなんだ」

撃鉄を起こす音があたりに響き、人々の罵声がピタツと止まる。

目の前に銃口を向けられた二オは、シエラを追い払った時の威勢もすっかりかき消されてしまっていた。なすすべもなく、足をガタガタと震わせている。

ハンターが引き金に指をやり、口元を不気味に緩ませる。二オが弾かれるとだれもが恐怖した、その瞬間だった。

「待ちなハンター。だれの娘に銃口を向けてるんだい？」

簡易ステージの上にあがり、ハンターの横へと仁王立ちしているアルマだった。

「あんたとは長い付き合いだけど、その引き金を引かせるわけにはいかないね」

「アルマか……確かに長い付き合いだな。だったらおれが本気かどうかもわかるだろう？」

銃口が二オからアルマへと向けられる。アルマは軽くうつむきつつ、微笑をもらした。

「あんたに撃てるのかい？ このわたしが」
「金のためならな。謝るならいまのうちだ」

改めて引き金に手をやると、アルマが一步前へと進む。

「わたしにだって大事なものがある。この俺は両親から受け継がれたマスカレードの宝なんだ。お金よりもずっと大切な お金では買えない思い出が詰まってる。あんただってそうだろう！」

「知らないな……」

「嘘だ！ わたしもあんたも、マスカーレイドを協力して創りあげた両親の子どもだ。あんたとの思い出だつてこの滝にはある！ それを忘れたとは言わせないぞ！」

「残念だつたな」

ハンターの人差し指に力が込められ、銃声がとどろく。

次の瞬間にはアルマの腹部から鮮血があふれ出した。衝撃でアルマはよろめきながら後ろへと倒れていく。

「忘れたよ。思い出なんていう金にならないものはな」

銃身の先から、煙が昇っていく。それを吹き消してから、ハンターは拳銃を懐へと戻した。

「いやっ、いやあ！ 母さん、しっかりして母さん！」

あまりの出来事に瞬時に反応できていなかった二才が、慌ててアルマへとかけより手を貸そうとする。が、アルマはそれを振り払いながらおもむろに立ち上がった。

撃たれた腹部から血液が流れては落ち、ステージ上に赤い紋様をきざんでいく。

「ハンター、あんたの心情、確かに受け取ったよ」

ふらふらと足取りを重くして、アルマはその場から立ち去ろうとした。

「ど、どこにいくの母さん！」

「アクサ先生の病院だよ。まだ死にたくはないんでね」

「じゃあわたしも！」

急いで駆け寄る二才を、無然にもアルマははじきとばした。他にも駆け寄ろうとした数人が、倒れる二才を見て動きを止める。

「あんたはここで抗議を続けるんだ。絶対に引くんじゃないよ」

「母さん……」

「なあに、足を打たれてるわけじゃない。一人で十分だよ」

無理やりの笑顔で手を振ると、アルマは一人で病院へと向かっていった。

出血したお腹をおさえながら、道路に赤い痕跡を残しつつゆつくりと消えていく。

「さあ、次はだれだ？ おまえか？ それともおまえか？」

ハンターが次々に拳銃を突きつけていくと、抗議のために集まっていた民衆はクモの子を散らすように走り去ってしまった。

残ったのは二オ、ユキ、ラビ、マックス、二オの頭上で一人オロオロするばかりのフェミリー。クネスにいたっては木陰に隠れながらようすを伺っているだけだ。

「かわいそうに、母親を撃たれたうえに仲間にはほとんど逃げられ、今の状況はどんな気分だ？ 二オちゃん」

ずっと泣き続けていた二オは、ハンターのひと言で涙を止めた。

震えていた体をピタリと止めて、顔をあげる。ニヤニヤといやらしく笑うハンター相手に、二オは我を失ってしまった。

「うあああ！」

雄たけびを上げながら、二オは一目散にハンターへと突っ込んでいった。が、すぐに二オは地面へと倒れこんでしまった。

ハンターの腕には先ほどアルマを撃った拳銃があった。どうやらグリップを二オの首筋へとたたきつけたようだ。

「まったく、弱い犬ほどよく吠えやがる」

倒れた二オを見下ろしながらあざ笑うハンター。そのままレスチアと一緒に事務所へと戻り始めていた。

「ハンター！」

ユキが大きな声で叫ぶと、ハンターは振り向きざまに指を二、三度振ってみせた。

「この辺りにはおれが地雷を大量に仕込んでおいた。死にたくなかつたらそのステージからこちら側には入らないことだな。下手すると衝撃で俺も壊れちゃうかもしれないぜ」

含み笑いが高らかな嘲笑へと変わりつつ、ハンターとレスチアは消えていった。

「ど、どうしましょう店長」

「とりあえずニオちゃんをアクサ医院へ連れて行こう。アルマのようすも気になるし、滝を守る方法も考えないといけない」

周りが大きくうなづく。ニオはそのままアクサ医院へと運ばれ、先ほどまでの喧騒が嘘のように滝の周囲は静まりかえっていった。

その4：ウォルガレンの滝防衛作戦

「いやいや、よくやってくれたハンター君。約束どおりあの役立たずの前金を支払おうではないか」

ハンターたちの控え室とは別の、工事の資料や指揮をとるための簡易事務所に、ハンターとレスチアは戻ってきていた。

黒い革張りのソファアは、プレハブ小屋にはまったく不釣り合いだ。残りのスペースには事務のために使われるであろう机が四つ。ハンターはその机の上に腰掛けていた。

ハンターの脇に、先ほどシェラが投げ返した封筒がドンと置かれる。ハンターは中身を確認してから、迷彩服の内ポケットへと入れた。

レスチアがソファアへ全体重をかけ、大きく息をついた。ソファアは迷惑そうに見上げながら、表情を大きくゆがませている。

「それに比べてあの女剣士は見かけ倒しだった。まったく、もうちよつと骨のある悪党はいないのか」

「そりゃアンタに比べれば、おれだって骨のある悪党じゃないからな。そうそういない」

「ほう、それはどういう見かね？」

大袈裟にハンターへと指を突きつけ、レスチアはハンターの言葉を待つ。

ハンターは手近にあるファイルの一つを手にとると、パラパラとめくって一枚の資料を取り出した。それには工事許可証という見出しにいろいろとかかれており、最後に王都のものであるう印鑑が押されている。

その許可証をレスチアに突きつけると、ハンターは口元をほころばせた。

「王都の許可を取ったなんて嘘だろ？」

「な、なにおお！」

慌てふためくレスチアを尻目に、ハンターは持っていた許可証の印鑑部分を指差す。

「あらゆる許可を王都からもらうとき、必要不可欠なのがこの印章だ。本来の印章は王都シングマスという表記に続き、王の名前と即位番号が表記されている。だがこの印章には王都シングマスという表記と王の名前は書かれているものの、即位番号が足りない」

「ばかな、そんなはずはない！　今までの印章だって即位番号など記されていたものはないぞ！」

「普通はわからんだろうさ。特殊なレンズを通すことで、初めて浮かび上がる代物だ」

言いながら、ハンターはポケットから直径五センチ程度のレンズを取り出した。

「な、なぜそんなことをお前のような賞金稼ぎが知っているのだ！」

「昔、王都で働いていたことがあったのさ。このレンズもその時に失敬したものだ。この印章はこのレンズで見ても、即位番号は記されていない。つまり、この許可証は偽物ってわけだ」

「ぐぐぐ……」

反論できずにギリギリと齒軋りを立てるレスチアの前で、フツとハンターは表情を和らげた。

「まっ、おれは金さえもらえれば細かいことを言つつもりはない」

「ほ、本当か？」

レスチアの齒軋りが止まり、パツと顔を明るくさせる。ハンターは工事許可証をファイルへと戻した。

「もちろん未払い時には雇い主と言えど牙をむくがな」

ファイルを置くとほぼ同時に、素早く抜いたデザートイーグルをレスチアの眉間へと突きつける。だが、レスチアは慌てもせず、逆に不適な笑みを浮かべ出していた。

「フッフッフ、君の言うとおりだよハンター君、確かにその許可証は偽物だ。だがそうになると、きみも相当な悪党だな。偽りの許可と分かっておきながらわたしの手伝いをするのだからな」

「なんとも言え。そんなことよりさつさと工事の準備を完了させたほうがいいんじゃないか？」

ハンターの意見であごに手をやり、レスチアは小さくうなずいた。「そうだな。まだ準備は完全とは言えんからな。ハンター君、きみはマスカーレイドの連中が来るまで待機しておいてくれたまえ」

「そうさせてもらうよ。工事の手伝いなんてできないし、したくもないしな」

鼻歌を歌いながら事務室を去っていくレスチアを見送り、ハンターはソファーへと腰を下ろした。

「さてと、もうすぐ仕事も終わりだな……」

指の骨を鳴らし、腕を組んで事務所を見渡すハンター。一瞬だけ不敵な笑みが浮かんだものの、戒めるようにすぐさまその笑みは消えていった。

二才の意識が戻ったとき、最初に視界に入っただのは天井だった。体の上下にはふんわりと柔らかい布団の感触、どうやらベッドの上にいるらしい。

鼻をくすぐる薬品のおいに、白を基調とした清潔感あふれる部屋。

そこがアクサ医院だと理解するのに、そう時間はかからなかった。「やっと気がついたかい、二才ちゃん」

目線を声のほうへと向けると、そこにはユキの姿があった。隣ではラビが心配そうに手をあわせている。

「わたし、どうしちゃったの？」

「覚えてないのかい？」

ユキに向かって軽くうなずく　と、とつぜん首筋に痛みが走った。

「いたっ！」

顔をしかめつつ首筋を押さえる。触った限り異常は感じられなかった　が、ラビの目が潤みだしたところをみるとそうでもないら

しい。

「あまり無理はしないほうがいいよ。アクサ先生もそう言っていた」
微笑むユキに二才は少し安心していった。ここにもしラビしかいなかったら、首筋の痛みが重症だと勘違いしただろう。

「ハンターにからかわれて、突っ込んで行っただのは覚えてるか？」

「うん、なんとなくだけど……」

「二才さんったらハンターさんにかかわれたとたん、とつぜん目の色を変えてハンターさんに襲いかかったんですう！ ラビたちびつくりしちゃって、もうどうなることかと思いましたあ！」

ラビの容赦ない大声に、二才は耳に指を入れて音量を調節する。

二才の記憶が正しければ、ハンターへと突っ込んだあと、一瞬にして目の前が真っ白になったはずだ。

「撃たれるかとおもったらハンターさん、銃のグリップで二才さんの首筋を殴ったんですう！ 二才さんそのまま気絶しちゃってえ！

慌てて店長と一緒にアクサ医院まで運んできたんですからあ！」

横ではユキが腕を組んで、うんうんと何度もうなずいている。

「わたし、重かった？」

「そうじゃないですう！」

ラビは二才の寝ていたベッドに、両手をおもいきりたたきつけた。
「どうしてあんな危ないことをしでかしたのかと言いたいんですう

！ 相手は拳銃を持っけて二才さんは丸腰ですよ！ 勝ち目なんてないじゃないですかあ！」

顔を二才の側、おでこがくつつくぐらいまで近づいてきたラビの真摯な目線に、二才は顔を伏せてしまった。

「なんか、悔しかったんだ……」

ボソツとつぶやく。ユキには聞こえていなかったが、近づいていたラビには十分に聞こえていた。

「だって、ハンターさんとは毎日顔を合わせてたし。いつも談笑して、仲間だって、ずっと思ってたから……」

二才の目から、水滴が落ちる。あわててラビは身を引き、ポケット

トの中に入っていたハンカチを二才に手渡した。

だが二才は受け取らず、服の袖で豪快に拭いさつてしまった。

「困った時とか、いつも相談に乗ってくれた。その時はお金なんていらないうって言うてくれたのに。こんなことなら……」

「二才……」

二人は二才を慰める言葉を懸命に搜していた。ラビの目は再び潤み始め、ユキはあごをこぶしの上にのせて、顔をしかめている。

そんな二人の心配をよそに、二才は拳を振りかざして叫んでいた。
「こんなことなら、Aランチの肉抜きなんて注文、拒否してやればよかった！」

ユキのあごはきれいにこぶしから落ち、もう少しでイスから転げ落ちそうになった。ラビにいたっては目をつるませたまま、周囲から声の出所を探そうと見回している。

「だって、Aランチって決めてる仕込みから肉を抜くんだよ！ 手間がかかるつたらありやしない！ それに料金はAランチと同じだけ払ってるんだから、肉の分損してるじゃない！ お金が大事ならそのぐらい気づけての！」

「ちよつと、静かにしてくれないかしら？」

呆氣にとられてポカーンと口を開けている二人の背後から、メガネをかけた女性が現れた。

金に近い茶色の髪をダラリと腰までのばした風貌は医者とは判断しにくい、彼女はれっきとしたこの院長だった。

「どうかしたのかしら？ 他にも病人はいるんだけど……」

「アクサ先生！ 聞いてよわたしの話！」

首筋の痛みもなんのその、二才はベッドから立ち上がると、軽い足取りでアクサに近づいていった。

開こうとした二才の口を、アクサがとつさに塞ぐ。

「マミモンガガ？」

「気がついてたんなら早く言うてくれない？ 用事があつたんだからさ」

「モウミ？」

アクサは口から手を離すと、二オのポニーテールをつかんで引張っていった。

「いた、いたいって、首筋もいたい！」

「それだけ元気があるんなら大丈夫でしょ。早くついてきて」

呆然と成り行きを見送ったユキとラビ。最後に思い出したようにユキが声をあげる。

「おれたちはオートエーガンで待ってるからな！ 対策を考えよう！」

「わかった。すぐ行くから待っててね。ちょっと、本当に痛いってば！」

アクサに反抗を続けながらも、二オは引きずられたまま病室から運ばれていった。

別の病室につれてこられた二オは、目の前の光景に愕然としていた。

ベッドで眠っているアルマの顔は、脂汗でびっしりと濡れていた。布団に隠れた部分は見えないが、この調子では全身を汗で濡らしているだろう。

「傷口から高熱が出ちゃってね……このままじゃ近いうちに亡くなるかもしれないわ」

「亡くなるって……死ぬってこと！？」

「他になにかあるかしら？」

平然と言つてのけるアクサに、二オが食ってかかろうとしたその時、

「二、二オ……」

アルマの口から蚊のすすり泣くような声が洩れる。

「さつきからうわ言のようにあなたの名前を呼んでるのよ。ずっと目を覚ますの待ってたんだから」

「おか、さん……」

ベッドの側に歩み寄り、二才がアルマの手をぎゅっと握る。

するとアルマはまるで待っていたかのように、ゆっくりと目を開いた。

「二才、二才か？」

「母さん！」

涙を目に溜めたままアルマへと抱きつくと、右手だけで二才を抱き返し、力なくぼやく。

「わたしは、もうダメかもしれない」

「なに言ってるの！ 弱気な発言なんて、母さんらしくないよ！」
娘に怒鳴られ、アルマは苦笑した。直後、抱いていた右手に力が込められる。

「そうだな。こんなのわたしらしくない。絶対に生きてみせるさ」
抱いていた手を離すと、アルマは力いっぱい微笑んでいた。だが、二才は密かに感じていた。思っていた以上に撃たれた傷は深く、アキサの宣告がおおげさではないことを。

「二才、淹のことは頼むぞ。ウォルガレンの淹はマスカーレイドの宝であると同時に、守り神でもあるんだ。絶対に壊したりしちゃいけない」

「わかってる。絶対に工事なんてさせないから。わたしの命に代えてもね！」

強くアルマの手を握ると、アルマは一瞬だけ微笑を見せた。それも束の間、すぐに表情を暗くし、二才から目を逸らしていた。

「母さん？」

呼んでも返事をせず、アルマはただ呆然と窓の外を眺めているだけだった。

「どうしたの？ 傷でも痛むの？」

「わたしは、母親失格だな……」

「えっ？」

想定外の話題変更、二才は少なからず戸惑いを見せていた。アルマの目から涙が一粒、頬をつたってベッドへと落ちていく。

「二オ、前言撤回だ。ウォルガレンの滝はどうなってもいい」

「えっ、どうして!」

ようやく二オの方を向いたアルマは、再び二オを自分のもとへと抱き寄せていた。

「二オはわたしたち夫婦の宝なんだ。滝よりも二オのほうが大切だ」
「母さん……」

「滝を守ろうと無理をして、二オには死んでほしくない。自分の命を第一に考えて、余裕があったなら、滝も守ってほしい。それで十分だ」

二オの肩を軽く叩いてから、アルマは再び顔を背ける。表情は見えなくなっていたが、わずかに震えているのが二オにはわかった。
「ちよっと喋りすぎたみたいだ。疲れたから眠るよ」

「うん、待ってて母さん。次に来る時は朗報を持ってくるからね」
「期待しないで待ってるよ」

二オはベッドの側から離れ、深く一礼してから部屋を出ていった。廊下では壁に寄りかかったアクサが、腕を組んだまま二オを凝視している。

「あとわたしに任せてちょうだい、最善は尽くすから。二オは……分かってるよね?」

「はい!」

アクサにも頭を下げた二オは、全速力で廊下を走り出した。

「こら! 病院の中は走っちゃダメ!」

二オの頭の中は滝を救うことで一杯で、アクサの声が届かなかったようだ。制止に反応することなく、二オは病院を飛び出していった。

目指すはオートエーガン 作戦会議に適した二オ陣営のホームだ。

店内には二オと共にハンターと向かい合っていたユキ、ラビ、マックスが、一つのテーブルで各々コーヒーを飲んでいた。

加えて入り口横の定位置にクネスがいる程度で、他の客は見当たらず。

ない。

「お帰り、二才ちゃん」

「ただいま。で、いい作戦は思いついた？」

「それが結構厄介でね……」

ふさぎこんでいるユキは、目の前のコーヒーを飲み干し、深くため息をついた。

「コーヒー、おかわり入れますね」

マックスが空になったカップを持つと、カウンター内に入ってコーヒーを作り出す。

「ちょっと、なんであなたがわたしの店の勝手を知りつくしてんのよ！」

マックスの後頭部にげんこつを食らわし、ひるんだすきにカップを取り上げる。

「ほら、さつさと座って！ コーヒーはわたしがいれるからカウンター内に入るな！」

マックスのでん部を蹴飛ばしてカウンターから追い出すと、二才は素早くコーヒーを五人分入れなおした。沸騰した湯が小さな気泡と共に音を出し、カップへと注がれていく。

二才は一人一人の席を順に回り、入れたてのコーヒーを配達した。

「厄介って、なにが？」

最後に空いた席へとコーヒーを置き、椅子へと腰掛けながらユキへと質問する。

「ハンターが言うには、あの近辺に地雷をいくつか仕掛けたらしいんだ」

「地雷？」

「踏んだ人はもちろんだが、その衝撃でウォルガレンの滝も破壊してしまうかもしれないというんだよ。これではおいそれと手出しできない」

頭を抱えてしまったユキを、ラビが心配そうに覗き込む。

と、店内に轟音が響き渡った。同時にテーブルの上にある四つの

カップが共鳴する。二才が机に両手を叩きつけ、勢いよく立ち上がったのだ。

「バツカじゃない！ そんなのハンターさんのハツタリに決まってる！」

「確かにその可能性は高い。だが、嘘だという百パーセントの確信はない。工事が終わればハンターの仕事は成功となり、その終了過程が滝の崩壊なら、爆発物で片をつけるのが一番手っ取り早いはずだ」

コーヒーを音を立ててすすったユキは、苦かったのか砂糖を二さじほど追加していた。

「地雷を踏む可能性があるのは百パーセントこちらの人間だ。むこうにとっては失っても痛手ではないからね」

「有り得ない話じゃないってわけか……」

現状を把握した二才は、ユキと同じように塞ぎこんでしまった。

「で、作戦としてはなにかできたの？」

「とりあえずいまのところ候補としてあがっているのはこの三つぐらいだ。二才の意見も聞いて、どれにしようか決めようと思う」

無地の紙に箇条書きにしてあった作戦を、二才は目だけを動かして黙読する。

ウォルガレンの滝防衛作戦

一 作戦名	ウォルガレンのモグラ作戦	提案者	マックス
-------	--------------	-----	------

Ⅱ フォール

オートエーガンの庭からウォルガレンの滝まで穴を掘り、敵の背後から奇襲をかける。ハンターとレスチアさえ捕らえれば、相手は士気を失うはず！

二 作戦名	ウォルガレンの爆弾処理班作戦	提案者	ユキ
-------	----------------	-----	----

Ⅲ ボウ

地雷探知機を使って、地雷を探し出す。解除しながら進めば敵のアジトまで安心してたどりつけるはずだ！

三 作戦名 ウオルガレンのサケ作戦 提案者 ラビ＝ラリイ
ウオルガレンの滝から続いているアケイトン川の中を上流に向か
って進みますう。滝まで行けば敵のアジトは目の前のはずですう！

「……………」

「どうですかあ？ わたしの案がやつぱり一番ですよねえ？」

無言で固まっている二オに、ラビが追い討ちをかける。

二オは名ばかりの作戦書を拾い上げると、ビリビリと破ってしま
った。

「ぜんぶ却下！」

「なっ、ど、どうしてですかあ！」

ラビが身を乗り出して怒鳴り散らす。ラビ以外の二人も二オの結論
にのけぞっている。ラビ同様に納得できないようだ。

「なんでですかあ！ ラビの作戦は完璧のはずですう！」

「ラビの作戦は間違いなく却下！」

「そんな、ひどいですう……………」

涙を目にためて今にもわめき散らしそうなラビを無視し、二オは
全身の力を抜いた。

口から望んでもいない嘆息があふれ出る。

「いい？ まずラビの作戦が却下のわけは、今の季節を考えてない
から。秋から冬に移ろうかって時期に川の中なんて通ってみなさい
よ。アジトについた頃には全員凍えてるわ」

「じゃあ、おれのは？」

返事の代わりに、マックスのおでこを人差し指ではじく。

「いまから穴掘って、滝の側まで開通するのにどれくらいかかると
思ってるの？ ふもとに着いたときには、ウオルガレンの滝の姿は
消えうせてるでしょうね」

「だったら、わたしの案はどうなんだね。時間もかからないし、寒
くもないが……………」

腕を組んで見返してくるユキに、二オは小さくうなずく。

「確かにこの三つの中だったら、ユキさんの作戦が一番まともだけど……無理なものは無理。だれも地雷の解除なんてできないじゃない」

「たえそうだとしても、地雷の位置を探知できればそれを避けて進むことができる」

意地でも自分の意見を通そうと、少しムキになりつつあるユキ。

二才はめんどくさそうに顔をしかめつつ、頭を掻きながらばやいた。

「じゃあ聞くけど、この平和な村で地雷探知機なんて代物、だれが持つてるの？」

「あつ……」

「肝心なところを見落としてるじゃない。もし持つてる人がいるとしても、きつとハンターさんぐらいよ。もちろん、貸してくれるはずないけどね」

二才の反論はどれも理にかなってるもので、三人は反論できずにうつむくしかなかった。

「じゃあ二才ちゃんは、なにかいい案があるのかい？」

「……あつたら、真っ先に説明してるわ」

「そうか、そうだろうね」

ユキは両手をあげて、背もたれへと全体重をうつした。

ギイと寂しそうに鳴く木製のイスは、まるで四人の心情を表しているかのようだ。

「それじゃあ、こんなのどうだ？」

マックスがとつぜんイスから立ち上がると、テーブルの真ん中まで体を乗り出してきた。

つられて残りの三人もマックスへと体を近づける。

マックスは一度咳払いした後、小声で作戦を述べた。

「あいつらの作った簡易ステージがあつただろ？ あそこで二才がシエラの好きな人を大きな声で暴露するんだ！ この作戦で間違いない！」

マックスとて、本気でいつてるわけではないだろう。場を和ませようとしたマックスの心意気なのだ。

当然三人の反応は予測できたらしく、マックスは素早くテーブルから離れて身構えた。

だが、三人はまったく怒りもせず蔑みもしなかった　むしろ微笑をもらしてなにやら楽しそうだった。

「あ、あれれ？　なんだってんだ」

あてがはずれてマックスは、全身から力を抜いた。とたんに、肩の上へと誰かの手が乗せられた。同時に力が込められ、マックスの肩が嫌なきしみ音をもらす。

「いてっ！　だれだっ！」

首だけ振り向かせた瞬間、マックスの顔から血の気が引いていった。三人の微笑が、爆笑へと変化していく。

「いい作戦だね、マックス。わたしも参加したくなっちゃう」

口元を痙攣させながら現れたシエラは、マックスをつかんだ手に更なる力を込める。長袖のシャツにジーンズというラフな服装武装を解除しているシエラの姿だ。

「シエ、シエラ！　これは誤解だ！　おれはハメられたんだ！」

「どっちでもいいから、ちよつと奥まで来てくれる？」

店の隅へとひきずられていくマックスに、三人は手を振る。続くは二才の送る言葉。

「じゃあ五分間休憩にしようか。シエラも五分で終わらせてね！」

「そ、そんな殺生な！　うぎゃああ！」

それからの五分間、マックスの悲鳴が続いたのは言うまでもない。

その5：事の真相

「さてと、休憩は終わり！ で、シエラはなにしに来たの？」

「なにしに来たとはご挨拶ね。ウエイトレスとして雇ってくれるっていうから、こうして武装解除して尋ねてきたんじゃない」

「そっか、そうだったね……ごめんなさい」

謝る二才を尻目に、シエラはマックスが座っていた椅子に腰をかけた。

当のマックスは店の隅でうつ伏せで倒れ、ボロボロになった服のままだ動いていなかった が、だれも心配していない。

しいていえばラビがマックスを、どこから持ってきたのか分からない木の棒で何度もつついているぐらいだ。

「いいのよ。わたしもこの仕事はあまり乗り気じゃなかったからさ。やめるためのいい口実が出来たと思えば」

「でも、傭兵としての信用はガタ落ち……」

顔をうつむかせた二才の肩を、シエラは軽くポンと叩いた。

「気にしなくていいの。傭兵の仕事しかやったことなかったから、ウエイトレスなんて、ちよつと新鮮で楽しみでもあるからさ」

笑い飛ばすシエラだったが、二才はシエラの横顔にかげりが浮かんでいる気がした。

「で、わたしはどんな仕事をすればいいのかしら？」

「ちよつと待つて。確かにウエイトレスとして雇うとは言ったけど。いまはそれどころじゃないの」

「なんだ、ウォルガレンの滝の件まだ片付いてないの？ レスチアなんて小物、ハンターさえどうにかすればすぐに尻尾を巻いて逃げていくでしょうに」

「そのハンターがどうにか出来ないから困ってるんだよ」

ユキに言われ、シエラはあっさりと納得してしまった。そのやりとりを横目で眺めながら、二才が突然手を打つ。

「シエラに聞きたいんだけど。ハンターが滝の回りに地雷を仕掛けた可能性ってある？」

「地雷？　どっからそんな発想出てきたの。あるわけないじゃない」
「だが、シエラが知らないうちにハンターが地雷を仕掛けたという可能性はあるだろ？」

ユキの意見にシエラは首をかしげて、逆に質問してきた。

「それって、いつ言われたの？」

「シエラが走り去ったすぐ後だが……」

「だったら間違いなく大丈夫ね。もしわたしが知らない間にハンターが地雷をしかけたって言うなら、わたしにも教えてくれるはずでしょ？　わたしとハンターは一緒に控え室から出てきた。わたしに地雷の場所を教えておかないと、わたしが踏んじゃうじゃない」

ニオとユキががちりと握手を交わす。そのまま二人はシエラへと向き直り、

「間違いない？」

同時にシエラへと聞き返した。

「ハンターが最初からわたしを捨て駒に使おうとしてたって言うなら、話は別かもしれないけど、今日の朝の時点では味方だったんだから、もし地雷を仕掛けていたら、踏まないように場所を教えくれるんじゃない？」

「確かに……」

ユキが頷く。ニオは腕を大きく振り上げると、威勢のいい声で叫んだ。

「よし！　作戦決定！　正面突破でハンターとレスチアを捕まえよう！」

はりきって店を出ようとするニオとユキに、背後からボソリとシエラがつぶやく。

「ハンターに撃たれずに、無事帰ってこれたら褒めてあげるわ」
現実に戻され、ニオはがっくりとその場にへたりこんだ。

「そうか、いくら地雷がなくてもハンターさんには二丁の拳銃があ

るんだ……」

「オーダーメイドの上に、使いやすいよう丁寧にカスタマイズされた拳銃がね」

二才がハンターの射撃を目にしたのは、今日が初めてだった。だが、噂で何度も聞いている。ハンターが狙った部位を外すなんてありえない。

それがたとえ、腕であろうと、膝であろうと　もちろん、眉間であろうと。

「やっぱダメじゃん！　ユキさんのバカ！　もうちょっと考えて行動してよね！」

「えっ？　えっ？」

不意をつかれたのとぬれぎぬがかぶさり、ユキは年甲斐もなくオロオロしていたが、咳払い一つで何とか心を落ち着かせた。

「と、とにかくだ。みんなも疲れているだろうし、ひとまず解散ということではどうか？　案外、一人で黙々と考えたほうが妙案が浮かぶかもしれないぞ」

「だけど、工事は明日からなんだよ？」

悲痛な声で叫ぶ二才に、ユキは優しく微笑みかける。

「明日の早朝に、再び集合だ。実現可能とハンターをどうするかという点を重点的に考えれば、きつといい案が生まれるはずさ」

それぞれがユキの提案に納得し、帰宅を始める。

二才はそれらを見送った後、店内へと戻った。そのまま呆然としている二才の頭に、一つの団体がよぎる。

「そうだ。自警団に頼めば……」

手早くオートエーガンの戸締りを完了させると、二才は自警団の事務所へ走り出した。

マスカーレイド内の住民はもちろん、旅人や商人などがからんだいざこざのために作られたものだ。

「だれか、だれかいませんか？」

二才が事務所内に飛び込み声をかけると、中から壮年の男性が姿

を現した。自警団の団長であるノルン＝レイジスである。

ノルンは白地に黒で染められたカズラに、黄色の十字架がかたどられた制服を上手に着こなしていた。加えて団長の証である紋章入りのブローチが、胸できらりと光っている。

「二オか……なにか事件でもあったのか？」

「大事件ですよ！ ウオルガレンの滝が破壊されようとしているんですよ！」

「その話か……」

ノルンは事務所にある椅子に腰をかけ、タバコに火をつけた。立ち上る煙をぼんやりと眺めながら、二オへと返答する。

「王都の許可を持ってきているんだろ？」

「だけど！」

「だったら、わしらの仕事はない。わしらの仕事は規律を乱すものや、マスカーレイドに騒動を持ち込む連中の相手だ。許可を得て工事をする業者に、口を出すことなどできるはずがないだろ？」

「だったら、どうして自警団に工事の護衛を頼まないんですか！ やっぱどこかおかしいですよ！」

「連中の考えることなど、わしは知らんよ」

煙を吐き出しつつ、ノルンが付け加える。

「まあ、二オたちの気持ちも分からんでもない。わしもあの滝が好きだからな」

「だったら！」

「明日になれば、全てが終わる。二オにできることは、歯を磨いて寝ることだけだ」

「全てが終わるって……滝が、壊れるってことでしょ！ そんなときに平然と寝てなんていられません！」

ダンツと机を両手で叩きつけ、鬼の形相で二オはノルンをにらんだ。だが、ノルンは顔色一つ変えず、灰皿でたばこの火を消しただけだった。

「もういいです！ 自警団には頼みませんから！ わたしたちの宝

はわたしたちで守ってみせます！」

二才はきたときと同じように、勢いよく事務所を飛び出していった。涙を流しながら布団へともぐりこみ、一晩中泣き続けた。

次の日の早朝、店内にはユキとラビしか姿を現さなかった。他のメンバーや毎日欠かさず現れるクネスさえ、今はいない。

それぞれが持ち寄った案も、あまり良い案とは言えなかった。シエラが単身ハンターへと勝負を挑む、工事のための機械を破壊するなどという意見から、レスチアを暗殺するなどという危険な意見までが揃ったものの、やはりハンターと、その拳銃の腕前が全ての作戦への強大な抑止力として働いているため、実現は難しそうだった。

どんな作戦でも共通でクリアしなければいけない条件　それはハンターに見つからないことだ。

ハンターがどこにいるか、なにをやっているかを把握するのは、そう容易ではない。

たとえみつからずに作戦を実行できる地点へと移動できたとしても、騒ぎを聞きつければきっとハンターは駆けつけてくる。

そうなれば滝の破壊を阻止しようとしている実行部隊は全員、蜂の巣だろう。

「もう、ウォルガレンの滝を救うのは無理なのかな……」

思わず呟いてしまった二才は、大きくかぶりを振った。ここで諦めてしまつてはレスチアの思う壺だ。そしてアルマの願いも水泡と化してしまうだけ。

「行こう。ウォルガレンの滝へ」

暗色漂うマスカーレイドの店内で、二才が悠然と立ち上がった。

「二才、いい考えが浮かんだのか？」

二才は小さく首を横に振った。だが、二才の表情には諦めたようすはない。

「だけど、黙って滝が壊れるのを傍観しとくわけにもいかないですよ。行動しなければ結果は出ない。見たり考えたりしてるだけじゃあ、何も始まらないよ！」

茫然自失だったユキとラビは、二才の力強い言葉で、死んでいた目に光を取り戻していた。

「そうだな。黙ってても勝手に壊されるだけだ。声を大にして訴えれば、なにか奇跡でも起こるかもしれない」

「奇跡に頼るなんて情けないですけど、確かにそうかもしれませんねえ！」

三人は勢いよく、オートエーガン飛び出していった。最後までウォルガレンの滝の存続をかけて戦うために。

三人が滝に着くと、クネス、シエラ、フェミリーと包帯と絆創膏で身を固めたマックスがすでに簡易ステージの前に集まっていた。どうやらオートエーガンに姿を現さなかったのは、直接ここに来たかららしい。

他の住民はというと、ほとんど姿がみえなかった。昨日のハンターのアルマに対する発砲で、住民は恐れおののいているのだろう。

「みんな！」

「早く二才！ なにかいい考えが浮かんだんだろ？」

クネスの問いに二才は無言で首を振った。全員の肩から力が抜けていく。

「ハッハッハ、無駄なんですよ。無駄！」

簡易ステージの上にはレスチアの姿があった。腰に手を当てて、高らかに笑い声を上げている。

「お願いだから、ウォルガレンの滝を壊すのはやめてよ！」

「そうは参りません。もう予定は出来上がってるのですよ」

そう言いながらレスチアは、手に持っていたくるくる巻きのポスターを開いてみせた。

そこにはウォルガレンの滝跡に造られるであろう、巨大なホテルの完成予定図がしるされていた。パッと見ただけでも二、三百人の人間が泊まれそうだ。

「このホテルが完成した暁には、マスカーレイドは単なる通過点で

はなく、素晴らしい宿泊街へと変わるので。そうすれば二才さんの店にも多くの人が訪れるでしょう？」

「そんなにたくさんお客さんがきても、わたし一人じゃ捌ききれない」

「いいじゃないですか。そこにいる用心棒兼ウエイトレスに活躍してもらえば」

皮肉を言われ、シエラの表情にグツと力がこもる。

「さあ、もうすぐあの滝が崩れ落ちる。そのさまと一緒に眺めようじゃないか」

ちよび髭をいじりながら、レスチアが後ろを振り向く。そこには事務所から歩いてきたハンターの姿があった。

「おおつ、ハンター君。君も一緒に眺めようじゃないか。あの滝が崩れていくさまは想像以上に豪快だと思うぞ！」

興奮気味に語るレスチアの申し出に、ハンターは無言で首を振った。

「悪いが、その申し出には賛同できない」

「ほう、どうして？」

「その前にあんたが捕まるからさ」

「そうかそうか、わたしが捕まるからか。わたしが……な、なにいつ！」

驚き戸惑うレスチアは、おもむろに一步後退した。それを追うようにハンターは、懷からデザートイーグルを素早く抜いて、レスチアの眉間へと突きつける。

「おかしいとは思わなかったのか？ これだけ大きな騒ぎをしているながら、自警団がなにも言ってこないなんて」

「それは許可をきちんと提示したから……」

「許可を自警団で確認してたとしたら、逆に反抗する民衆を抑えにかからないといけないはずだ。違うか？」

「ど、どうということなんだ！」

「簡単なことだ。おれが自警団の依頼を受けて内部の調査を行って

いたのさ」

フツと一瞬だけ笑うハンター。だが、その笑みはレスチアではなく、二才に向けられていた。

「証拠はそろった。王都が発行したと偽った許可証に、それを認めた発言が録音されたテープ」

言いながらポケットから出したテープを再生する。そこにはハンターとレスチアが事務所で話していた内容が、きれいに録音されていた。

「ついでにあんたの写真も添付しておいた。これで逃げてもお尋ね者だぜ」

「く、くそつ！ だれか！」

「おっと、従業員はみんな逃げ出したぞ」

「な、なにおお！」

顔を真っ赤にして抵抗しようとするレスチアの腹に、ハンターはけりを一撃加える。それだけであっさりとレスチアはうずくまったしまった。

「おい、フェミリー」

「へっ、わたし？」

ハンターたちのようすを呆然と見ていたフェミリーは、突然の指名に泡を食いつつ自分を指差す。

「自警団の事務所までひとつ飛びしてくれ。すべて終わったってな」
「は、はい！」

フェミリーは慌てて事務所の方向へと飛び立っていった。

その後数分後には、自警団の団長であるレスチアと部下数名が現れていた。部下も団長と同じ格好ではあるが、階級がないのかブローチのようなものはついていない。

「おいっ、しっかり歩け！」

自警団に連れられ、レスチアは連行されていった。

「フツ、わたくしを甘く見ないことだ。いずれわたくしが笑い、お前たちが泣く日が来るということを肝に銘じておけ！」

去りぎわに捨てゼリフを吐き、レスチアは自警団の事務所の方角へと連れて行かれた。

その後、王都の裁判所へと運ばれ、判決が下されるのだ。

「よくやったなハンター。報酬は後で事務所まで取りに来てくれ」

ノルンが言うと、ハンターは両手を軽く挙げてみせた。

「なーに、今回は無償でいいさ。おれもこの滝を守りたかったし、あいつがくれた前金がなかなかの金額だったんでな」

ハンターの好意にノルンは敬礼を返すと、部下の後を進んでいった。いまだに現状を理解できていない二才の肩を、ポンと叩く。

「言っただろ？ 二才にできることは歯を磨いて寝ることだけだ」と

二才は目を丸くしたまま、無意識に頷いていた。そのままノルンは姿を消していく。

「さてと、一件落着いてわけだ。聞きたいことがあるんなら一人ずつどうぞ？」

たばこに火をつけつつ、ハンターは簡易ステージの上に座った。

「じゃ、じゃあまずわたしからいいかい？」

ユキが手を上げると、ハンターは軽く手を差し出した。どうぞと、いうしぐさだろう。

「ハンターは最初から自警団に雇われていたのかい？」

「ああ。怪しい連中が滝の周りに集まりだしてるから、なにをしようとしているのか調べてくれってな。まっ、依頼がなくてもおれはやってただろうがね」

煙をフーツとふき出しつつ、ハンター。まったく悪びれたようすはない。

「それじゃあわたしを誘ったわけは？」

シエラがユキに続いて質問する。ハンターはたばこの火を消し、両手を後ろに伸ばして体を支えた。

「本当は調査の協力をしてもらおうと思ったんだが。途中で気が変わった」

「気が変わった？」

「シェラがあんまり仕事に乗り気じゃなかったようだから、やめるように仕向けたのさ。シェラが抜けた後におれが場を丸く治めてしまえば、当然おれの評価は上がる。それを利用したってわけだ」

「じゃあ、なんでそれを早く説明してくれなかったんですかあ！」

ラビの反論に、ハンターはプツと吹きだした。

「当たり前だろう。レスチアの前でそんなことを言えるわけがない」

「だったら、合図というか……どうにかしてわたしたちのだれかに伝えようとか、思わなかったんですか？」

クネスの問いに、ハンターはなぜか首をかしげた。まるでクネスの質問が的外れしているかのようだ。

「聞いてないのか？ アルマから」

「アルマ？ アルマって二オの母親のアルマかい？」

「他にだれがいるんだ？」

アルマという名は、この街に一人しかいない。そこでずっと黙っていた二オはようやく声を張り上げた。

「だったらどうして……どうして母さんを撃つたのよ！」

簡易ステージの上にのぼった二オは、容赦のない平手をハンターの頬へと叩きつけた。

「ちよつ、落ち着け二オ！」

「うるさい！ 言い訳なんか聞かないわ！ もし本当に自警団の任務で最初からあいつの企みを阻止するつもりだったんなら、母さんを撃つ必要はなかったはずよ！」

「だから、話を聞けって！」

ハンターの制止をきかず、二オはハンターの体中を叩きまわした。慌ててユキが二オの暴挙を止める。

「待つんだ二オ！ ハンターの話を聞こうじゃないか！」

「だって、だって！ 母さん死にそうなんだよ！ ハンターさんのせいで母さん死んじゃうかもしれないんだよ！」

ユキの手の中でじたと暴れる二オ。ようやく二オの暴行を潜り抜けたハンターは、ゆっくりと立ち上がりつつ頭をかいた。

「まったく、落ち着いて話を聞けって……」

「落ち着いていられるわけ……ンガガ！」

まくしたてる二オの口を、ラビが両手で塞ぐ。辺りが静まり返るのを確認してから、ハンターは話しはじめた。

「あのなあ、おれが本当にアルマを撃ったとでも思ってるのか？」

「ンググググッ！」

ラビの活躍のおかげで、二オの反論は意味を成さなかった。

「おれが撃ったのは普通の銃弾じゃなくて、ペンキの入った着色弾だぞ？」

「グッ？」

暴れていた二オの動きが止まり、ユキとラビがゆっくりと手を離す。

「着色……弾？」

ハンターは答えず、鼻歌を歌いながら拳銃に銃弾を込めなおしていた。そして突然、ハンターの銃身がシェラへと向けられる。

パンッ！ という乾いた音と共に、シェラの腹部に赤色が広がった。

シェラは信じられないものを見るように赤くなった腹部に手をやると、赤色が手に付着する。

「ハンターさん！」

二オが声をあげるのを手で制し、ハンターはゆっくりとシェラへと尋ねた。

「痛いかな？ シェラ」

シェラは自分の手を震わせながら、ゆっくりと首を横に振った。

「全然痛くないわ」

「ええっ！」

二オは慌ててシェラへと駆け寄り、付着した赤色をさわると、合わせて臭いも嗅いだ。

「ただの、ペンキじゃない、これ」

「そういうことだ。普段は道に迷いそうな森の中なんかで、目印と

して使うんだけどな」

ハンターは拳銃を懷にしまい、ニツコリと微笑んでみせた。

「それを利用してアルマにメッセージを送ったんだが、まさか伝わってなかったとはな。おれの心情は受け取ったって言うてたから、真意は分かっていたはずなんだが……」

首をひねるハンター。だが、現実にはアルマは入院している。それで二オが納得できるはずもない。

「でも！ 母さん入院してるんだよ！」

「はっ？」

「腹部の傷が原因で重体だって！ 脂汗かきながら二オ、二オってうわごと言って！」

二オの訴えを聞いたハンターは、あごに手をやり考えるしぐさを見せた。

「二オ、おまえその傷確認したのか？」

「へっ？」

「おれがうつた弾痕だよ。ちゃんと確認したのか？」

「い、いや……でもアルマ先生が……」

おたおたし始めた二オに、ハンターは顔を伏せながら口を緩ませる。

「二オ……」

「も、もしかして？」

ハンターはこっくりと頷いた。

「おまえ、遊ばれてるぞ」

「うそでしょ……」

「自分の命ですらいたずらの種に使う。アルマの得意技だからな。おれも何度騙されたことか……」

信じられないといった表情の二オも、心の中では納得していた。二オの母親はいたずら好きで、先日も醤油と酢の中身を変えているというだれにでも分かるいたずらがあった。

調味料だけではなく、いろんないたずらを細部にしかける。それ

も、忘れた頃にやってくるのだから性質が悪い。

だが、それが酒と同じくアルマの生きがいなのだ。

「わたし……ちょっと病院に行ってくる」

引きつった笑みを浮かべながら、二才は一人病院へと向かった。

こめかみにうつすらと青筋が立っている。

「ありやりや。こりやさすがのアルマも大目玉だな」

「まあいい薬にはなるだろ」

「アルマさんがちゃんと役目を果たしていれば、大騒ぎにならずにすんだんです」

だれもアルマを助けに行こうなどとは言い出さず、むしろ喜んで二才を見送っているように見えた。

病院の中はあまり忙しくないのか殺伐としており、看護婦の姿がちらほらあるだけだ。

二才はアルマの病室へと急いだ。部屋の名前を確認してから、おもいきり扉を開く。

「母さん！」

目の前の光景を、二才は疑いにくくなった。

そこには、酒を飲みながらアクサと談笑しているアルマの姿があったのだ。

だが、呆然と目の前の光景に立ち尽くしている二才にアルマは気づくと、慌ててお酒を隠して布団の中へともぐってしまった。

そばにいたアクサが、すかさず霧吹きでアルマの顔に水をかける。

どうやらこれが脂汗の正体だったらしい。

「二才……母さんはもうダメかも……」

この期におよんでまだ重体の演技を続けるアルマに、二才は肩を震わせながらつかつかと近づいていく。

そのままアルマの頭を、そばにあった雑誌でおもいつきりはたいいていた。

「いたっ、なにすんだ親に向かって！」

「うるさいうるさい！ 当然でしょこれぐらい！」

床に雑誌を放り投げ、二才は力なく膝をついた。

「本気で、心配したんだからね。母さん死んじゃったらどうしようって、本気で心配したんだからね！」

淡い吐息に加え、乾いていた目から再び涙がこぼれる。

そんな二才の肩をアルマはポンと叩き、続いて二才の髪をくしゃくしゃにかき混ぜた。

「なにすんのよ！」

「わたしの芝居も捨てたもんじゃないな。無事だったからできる他愛のないいたずらだから、気にすんな」

「言える立場じゃないでしょ！」

お互いから飛び交う罵詈雑言。止めたのはアクサの一声だった。

「静かにしなさい！ ここは病院なのよ！ アルマもバレたんだからもう退院！」

「ええ、もうちょっと入院しときたいな」

「ダメよ。さつさと帰った帰った！」

ぶつくさ文句をたれながら、二人は病室を後にしようとした。

後姿を見送りながら、アクサは二才だけを引き止める。

「二才、アルマを許してあげてね。照れくさくて普段いえないようなことを、この機会に言っておきたかったのよ」

「それって……」

「フフツ、いつまでも仲良くオートエーガンを経営してね。わたしも近いうちに夕食でも食べに行くわ」

「はいっ！ ありがとうございます。アクサ先生！」

深くお辞儀をした二才に、遠くからアルマの声が響く。

「おい、なにしてるんだ！ 早く帰って飯を作ってくれよ！ 病院の食事は量が少なくて腹が膨れないんだ！ 味も大したことないし！」

「ちよつと、失礼でしょ母さん！」

代わりに謝る二才を手で制し、入り口近くまで移動していたアル

マにアクサが叫ぶ。

「悪かったわねアルマ！ あ、それと昨日と今日の入院代として、オートエーガンの食事を何度かごちそうしてもらってから、そのつもりでね！」

「ええー、わたしのおごりなお？」

自分の悪巧みがマイナスに働いてしまい、アルマはようやく反省の色をみせる。

アクサとニオはしてやったりと、軽くハイタッチをしてから別れていった。

その6：三日後……

ウォルガレンの滝破壊未遂の事件から、三日が経過した。マスカーレイドは普段どおりの平和な毎日が続いている。

オートエーガンの店内は開店からまだ時間が経っておらず、いつもの位置にいつもどおりクネスがいるだけだ。

「いらっしやいませ。あ、ハンターさん！」

現れたハンターに、二オが明るく声をかける。そばでは白いフリフリのエプロンを着けたシェラが、モップで床を掃除していた。

ハンターは顔を曇らせたまま店内へと入ってきた。顔色も悪く、どうも元気がない。

「どうかしたの？」

コップに水を入れて、ハンターの前に出しながら二オが尋ねる。

ハンターはぼそりとつぶやいたが、二オには聞こえなかった。

「えっ、なんて言ったの？」

「レスチアが無罪になったって言ったんだ」

「へえ、無罪かあ……って、無罪！ どうしてよ！」

慌てふためく二オに、ぼそぼそとハンターが話を続ける。

「王都警備部隊つてのがいてな。まあこいつらが各地で起こった犯罪者を取り調べたり、有罪が無罪かってのを裁判で判断したりするんだが……どうやらその部隊の上層部に、レスチアと組んでいる輩がいるらしい」

「レスチアと組んでいるって、どういうことなの？」

「つまり、ウォルガレンの滝を壊し、ホテルを建てることに賛成だつてわけだ。レスチアがホテルを建てた暁には、相当な額がそいつに転がり込むことだろう」

バンツ！ とカウンターの拳を叩きつけ、ハンターが齒軋りを鳴らす。

「それじゃあ、そいつがいる限りレスチアを有罪にすることは出来

ない……」

「そういうことだ。そしてレスチアはいろいろな手段を用いて、ウォルガレンの滝を破壊しに来るだろう」

「そんな……」

緊迫した雰囲気、店内を駆け巡る。

と、突然クネスがハンターの元へと歩いてきた。

「気にしなくてもいいんじゃない？ ハンターさん」

「どうしてだ？」

ハンターが訪ねると、クネスは事も無げに答えた。

「まず、レスチアは偽の許可証を使って工事をしようとしていた。ということは、正式な工事の許可を取るの難しいと考えられる」

「まあ、そうだろうな。王都を統べるシングマス五世はウォルガレンの滝が大のお気に入り、時折お忍びで観光に来てるぐらいだからな」

「そうだったの？」

驚きの声を上げたのは二才だ。生まれてからずっとマスカーレイドに住んでいる二才も、王都から王様が来ているなど初耳だった。

「となると、これから先も許可を得ることはないだろう。だったら工事を中止させるのは簡単だ。それに……」

「それに？」

いつの間にかそばに来ていたシェラが、会話に参加しようと聞き耳を立てる。

「それに、僕たちはウォルガレンの滝が狙われていることを知っているし、レスチアの顔も知っている。滝は日ごろから警備すればいいし、レスチアがマスカーレイドに現れたら警戒を強めることもできる」

三人とも納得したのか、ほおーと感嘆の声を上げる。

「他にも理由はあるさ……ん？」

「どうかした？」

クネスは口の前で指を立て、二才を黙らせる。そしてポンと手を

打つと、

「そうか、なるほどな。うんうん」

一人で頷いている。三人がどうしていいか迷っていると、クネスは自分の特等席へと戻っていった。

「ちよつと、クネス！」

「そうかそうか……主人公の友人に情報通を入れれば、話がドンドン広がるぞ！」

言いながら原稿に小説を書き進めていく。どうやら小説に使ういいアイデアが浮かんだらしい。

こうなると当然、クネスは小説の世界から出てこなくなる。周りがまったく見えなくなるのだ。

「ふーっ、まあ気にしてもしょうがないのかもね」

「そうだな。おれも昔の友人とかに声をかけてみよう。うまくいけばレスチアを無罪にした黒幕が分かるかもしれない」

「昨日の今日で、また来るほどレスチアも馬鹿じゃないだろうし」

三人はそれぞれ納得して、それぞれの仕事に戻った。シエラは掃除、ニオはハンターの注文になるであろうAランチ肉抜きを調理しに、そしてハンターはそれを待つ。

数分後、ニオは裏のキッチンからAランチを持って現れた。

「はい、お待ちどうさま。ハンターさん」

「んっ？」

ハンターは運ばれてきた食事がいつもと違うことに気がついた。

見た目は普通のAランチ　そう、普通のAランチなのだ。

「ニオ、これ肉が抜いてないぞ？」

ハンターが尋ねると、ニオはペロツと舌を出した。

「今日だけはハンターさんにお仕置きだよ」

「おれにお仕置き？　どうして」

「ウォルガレンの滝を売って、わたしたちを裏切ったお仕置き」

「ちよつと待て。あれは芝居だったんだぞ」

抗議するハンターにもニオは動じず、ニッコリと笑ってみせた。

「そう、だから今日一日だけ。もし本当に裏切ってたなら、出入り禁止になってたんだから。そう考えたら安いもんでしょ？」

店内の隅で、シエラがクスクスと忍び笑いをしている。ハンターはAランチの肉を突つつきつつ、脇にどけようとした。

「言っておくけど、オートエーガンでのお残しは、わたしに対する挑戦状として受け取るからね」

口に手を当てつつ高笑いを放った二才は、裏のキッチンへと入っていた。

「シエラ、こっそり肉だけ食ってくれよ」

ハンターの申し出にシエラは、

「肉の追加なら喜んでするわよ。わたしも傭兵としての職を失った恨みがある、し」

プププと口を閉じたまま笑い続けるシエラ。店内に着いたときよりも、ハンターの顔色が一層悪化していく。

後ろを振り向いてクネスを見るも、やはり小説の世界に入り込んだまま戻ってきていない。

「くう……」

意を決して口の中に肉を放り込む。苦虫を噛み潰したような顔に、こっそり覗きこんでいた二才とシエラの笑声が、豪快にこだまする。今は平和な日々をこなしていくマスカーレイド。だが、これから先、マスカーレイドはいろいろな事件へと巻き込まれていくことになる。

ウォルガレンの滝との共存を望むマスカーレイドの住民の願いそれだけはいつまでも変わらない。たとえ、どんな事件に巻き込まれようとも。

（END）

その6：三日後……（後書き）

初めまして。水鏡樹というものです。

『マスカーレイドに異常なし！？』はいかがだったでしょうか？

このマスカーレイドという街は、個性的な住人の多い面白い（住人にとってはそうでもないかもしれませんが……フェミリーとか（笑））街です。

今後も住人たちの活躍&災難をどんどん執筆していきたいと思えますので、気に入っていただけの方は時折覗いてもらえると幸いです。

感想などすぐく力になりますので、暇があれば評価&コメントも願います。

それでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5815a/>

マスカレードに異常なし！？ 第1話

2010年10月8日15時47分発行